

こどもホタルレンジャー2019

活動レポート

✂切 12/21(金)

① 団体名 (学校、企業、NGO/NPO など)	よみがな くめじまほたれんじゃー 久米島ホタルレンジャー
② 代表者ご連絡先	よみがな さとうふみやす 氏名 佐藤文保
	じゅうしょ おきなわけんしまじりぐんくめじまちょうあざおおた 〒/住所 沖縄県島尻郡久米島町字大田 420
	TEL/FAX 098-896-7100
	メール hotarukan@woody.ocn.ne.jp
③ 活動名 (タイトル)	よみがな ほたるのもりとかわをみんなでつくりまもるかつどう ホタルの森と川をみんなで創り守る活動
④ 活動場所 (様子や環境など)	久米島ホタル館でホタルの生息地づくりなど、サワヘビ保護区でヤマガメのすみ森を守る、サンゴ礁の海を守るごみ拾い、カンジダムの外来魚を減らす活動等久米島全域
⑤ 活動したこどもの人数・学年	小学1年生6人、2年生2人、3年生3人、4年生6人、5年生0人、6年生0人、 中学1年生1人、2年生1人の小中合計19人 (幼稚園以下14人、高校3人) 計 36人
⑥ 活動継続年数	2007年 4月 20日 ~ 2019年 12月 21日 上記の期間に 12年実施した。

⑦ 活動グループ (学校・企業・NGO/NPO など) の紹介 (400字程度以内で簡潔に)

久米島ホタルレンジャーは、2007年に結成され12年目になります。年間50回ほど、毎週土曜日の午前中に活動を行います。ホタルレンジャーが行うホタルの里づくりを主とした自然体験活動は、生きものを育てること、それを通して自然への気づきや自然を守ることの大切さを理解すること。在来植物を育て、川や湿地に流出した赤土・泥を取り除き、埋もれた石を再び積み上げて自然な流れや滝、森をつくってクメジマボタルの生息環境を復元すること。落ち葉を集めて陸生ホタルのえさであるカタツムリやミミズを育てるなどのホタルの里を再生することなど、ホタルの森と川をみんなで創り守る活動を行ってきました。そして川や海、森に捨てられたゴミを拾う活動も毎年継続しています。これらの活動は、島内外の学校の旅行や授業等でも取り入れられ、球美の里やツアー等の島外から来られた方々とも一緒に行っています。今年は、その集大成ともいえる全国ホタル研究会の大会が16年ぶりに久米島で行われ、帰郷した先輩ホタルレンジャーと一緒に発表しました。そして、クメジマボタルの産卵場所の滝づくりと、川の泥と石を使った手作りのピザ窯づくりも行いました。

⑧ 活動の概要 (600字程度以内で簡潔に)

ホタルレンジャー活動は、自然にやさしい子どもの手による川の泥上げ、赤土取り除きと小石積みの瀬づくりを通しての自然体験が中心です。今年は、クメジマボタルの産卵場所になる滝づくりを行いました。滝の周辺に森を創るための植栽やヤゴやアメンボ、小さなゲンゴロウなどの放流だけでなく、川や海のゴミ拾い、バスターフィッシング、ツアー客への案内や発表など、さまざまな取り組みを行いました。ホタルの里づくりは、滝が完成したこともあって、水辺環境がさらによくなりました。みんなに知らせる活動として大きな成果を上げています。ホタル館を訪れる人々や子どもたちへ向けての発表は、全国ホタル研究会沖縄久米島大会への参加発表もあって、大きな成果を上げることができました。特に、先輩ホタルレンジャーもいる劇団シンデレラの劇は本当にすばらしく、私たちも特別に参加させていただき大感激でした。夏は、那覇・豊見城の漫湖で行われる子どもラムサール会議に3人の代表が参加しました。そして、川やサンゴの海では、不法投棄され漂着したごみを拾いました。ホタル館に堆積した赤土の泥と石を使ってのピザ窯づくりも完成し、ホタルレンジャーキャンプが特別に楽しいものになりました。そして、クメジマボタルの産卵場所となる滝周辺に、陸生のホタルもすめるように、餌であるミミズやカタツムリの餌の落葉をたくさん集めました。今年もホタルが好む里づくりのために、様々な工夫と取り組みをみんなで行うことができました。みんなの期待するホタルの里づくりは着実に進んでいます。

※この用紙には、活動した子どもたちの先生や団体の代表(おとな)が記入してください。

⑨ 活動の目標を記入してください。(300字程度以内で簡潔に)

久米島ホタレンジャーは、みんな仲良く、久米島・地球を守ってゆくために、人の暮らしと自然、そこにすむ生きものを大切にすることを目標に、生きものや自然の目からも見ながら、人だけに都合のいい見方にゆがめられることなく、それらのかかわり方をまじめに考え取り組んでいくことを目標にしています。久米島オリジナルでオンリーワンの自然に、可能な限りたくさんふれる体験活動を通し、自然の不思議さや美しさ、そして、自然との関わりから生じる喜びや痛みを知ること、その仕組みを学び、創り守り、自然でいっぱいにする活動、素直な行動を育みたいと考えています。

⑩ 活動の内容や調べたことを記入してください。写真やイラストなども添付してください。(2000字程度以内で簡潔に)

全国ホタル研究会沖縄久米島大会：発表！



2019年4月20日(土) 於 久米島具志川農業環境改善センター 研究発表

① 「久米島ホタレンジャー、ホタルを守るために島の自然を楽しく学び保全する活動発表」

國吉朝陽・富山心・仲宗根星斗・當間彪真・小川陽翔・當間七星・近藤脩平・山里穂高・

國吉甚希・吉永蹄・吉永龍

② 「久米島のサワガニ研究発表」 佐藤智映

③ 「ホタルが町にやってきた」 劇団シンデレラ&ホタレンジャーOG/OB

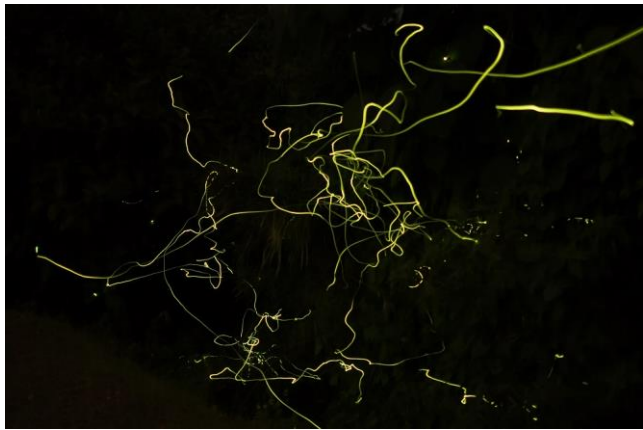
佐藤文治・仲間万珠・中根みすず・佐藤友里子・新城そら

④ 「久米島のホタルを取り巻く環境とその現状について」 佐藤文保

4月20日全国ホタル研究会沖縄久米島大会でホタルレンジャーが発表した。この一年間、さらにがんばりたいと思います。とてもうれしい一日でした。

ホタル大会でホタル観賞会

4月19日クメジマボタル観賞会:久米島ホタル館で全国から集まったホタルファンと一緒に多くのホタルを見ることができました。



昨年同様、ホタル館館長のホタルのお話を聞きながら、ホタル観賞会に出かけました。島に8か所もあったクメジマボタルをたくさん見ることのできる最後一か所の鑑賞地もついに見られなくなりました。でも、ホタル館のホタルが3種類同時に出現する日というチャンスに恵まれたおかげで、ホタル観賞会は大成功でした。全国から来られたホタルファンの皆さんに感謝され、とてもうれしい日になりました。ホタル館では、私たちの先輩ホタルレンジャーが、まだ小中学生だった12年前からクメジマボタル復活に取り組み、遂に2011年、700匹も出現する場所に再生することができたのですが、その年と翌年の大量の赤土流出で水環境が悪化し再び消えてしまいました。でも、川の赤土泥をみんなで取り除く作業を毎年続けてきたおかげで、ホタル大会で多くのホタルを見ることができました。そして、迎えのバスが来るまでのしばしの間、暗闇をやさしく照らすホタル、その傍らで舞を踊る人、温かく心に残る感動の時間をホタル館で過ごすことができました。

こどもの日 ホタル館の自然に親しむイベント



久米島馬牧場の協力で、4頭の馬がホタル館にきました。馬をひくのもホタルレンジャーで活躍しているメンバーの一人です。こどもの日は、多くの業者さんの協力で食事や買い物、ワークショップができるようになりました。子どもだけでなく、家族みんなで一日楽しめる市とイベントの手作り広場のようになっています。チーム久米島直売市の皆さんの協力があって、久米島赤鶏やアグリット久米島、NPO法人くめじまなど、綿菓子売りのおじさん、Yayoiさんエコバックづくりとホタル大会で人気のホタルストラップ販売、久米島手芸部のきれいさんのクルミボタン髪ゴムづくり、アイランドカレーセンターのビーガンカレーやタコライス、マキノコーヒーの久米島ホタルコーヒーなど、とてもお世話になりました。子どもたちも本当に大喜びでした。



さらに、アフリカンバンド tumba のドラムサークルの田村圭介さんが、多くの子どもたちと一緒に、ジャンベやカホン、ケンケニなどのトーキングドラムの独特のリズムを教えていただき、打ち鳴らされる雰囲気を楽しんで体験しました。



手作りピザ窯とオリジナルピザづくり

工藤さんの指導で手作りピザ窯（アース窯）づくりが6月下旬に始まり、7月31日に完成しました。ホタルエンジャーも石と泥を川から運びました。泥は、昔堆積した赤土です。



ホタルのための滝づくり

クメジマボタルの産卵場所となる滝づくりが始まりました。「崖線の細流・滝環境の復元再生」が目的です。現在進めている赤土泥の手作業での取り除きと、絶滅危惧種や固有種・在来種を増やすために、瀬と淵の環境を復元する作業に加え、崖線から消失している滝と細流支流環境を創出することが目的で始まりました。

浦地川上流は久米島県立自然公園特別保護地域になっており、種の保存法指定種のキクザトサワヘビやクメジマボタル、さらには固有種のサワガニ類の生息地になっています。下流のホタル館にもわずかだが生息しています。しかし、農地からの赤土や肥料などの流出で流域が埋まり、水・生物環境が悪化しています。加えて、台地部が土地改良による開発で、崖線の滝や細流支流が消失・湧水量も激減、生物多様性の低下が著しく進んできました。ホタル館敷地内に滝と細流支流の人工環境装置を設置することで、クメジマボタルの産卵場所が復元でき、将来自然繁殖が期待できます。この事業は河川財団の助成金で創ることができました。



- ①滝作り。滝と細流支流をショベルカーで形作り、シートを滝と支流細流の創出部分に敷き詰めます。滝に大きな岩や石を積み上げ、細流支流部分に石や砂、泥を敷き詰めます。上流から水をホタル館敷地にチューブで導水し、既存のビオトープと本流の瀬と淵につなげます。
- ②モニタリング調査。創る前の既存のビオトープと川の瀬と淵の調査を行います。つくられた直後の滝や細流支流の生物を含めた環境データをとります。間隔をあけて新規加入生物等を定性的定量的に記録します。必要に応じて、ビオトープに水生生物を放流します。ホタルのえさのカワニナ等移動力の低いものを優先します。
- ③外来種対策。侵略的外来生物が侵入しないように注意し、穏健的な外来生物は必要に応じて取り除きます。
- ④協力主体。これらの事業・作業は、ホタル館の指導の下に、主にホタレンジャーの協力で続きます。

陸生ホタルの里づくり：ビオトープづくりは自然な肥料づくり

ホタル館のビオトープづくりのために、木を育て、花を育て、野菜を育てます。育てるために、草刈りの葉っぱや枝、落ち葉や死骸などを集めて肥料にします。さらに、側溝の泥や川に堆積した赤土泥も取り除きます。その泥土は、ホタル館のビオトープづくりに役立っています。ホタルのエサのカタツムリやミミズを育てることが目標です。今年は、1月12日に琉銀グッドニュースの取材を受けました。大屋(たいや)地区の側溝の赤土泥上げとその泥を再利用したビオトープ作り・植栽。5月には、5人のボランティア団体(モルモンヘルピンズハンズ)の皆さんにも協力していただき、みんなで植栽しました。





ホテル館の自然を知る活動

ネイチャーゲームや生きもの探しをしながら自然を見つけます。川や森を調べて、創って、守りながら、自然の仕組みを学びます。久米島ホテルの里自然公園久米島ホテル館の自然を知るための最初の調べ学習です。ホテルだけでなく、ホテルの仲間を植物から鳥、トカゲ、カエル、昆虫、カタツムリ、ミミズ、ワラジムシ、キノコなど森の生きものを探します。この体験学習が、ホテル館のビオトープづくりに役立てられます。ホテルの食べ物は何かな？ホテルを食べる生きものは何かな？ホテルを食べない生きものはなぜホテルを食べないのだろう？これらの疑問を、ホタレンジャー活動で学んでいきます。



島を探検し生きもの探し自然を知り調べ、守りための活動

昨年落書きされた国の天然記念物のリュウキュウヤマガメが、また落書きされていないか調べに行きました。ペットのネコや外来種のカメが自然の生きものやヤマガメに与える恐ろしい影響と、生きものをみんなで守るために、カメやネコなどのペットを最後まで責任をもって飼うことの大切さを学びました。そのあと、みんなでラムサール条約登録湿地の探検を行い、森にすむ生きものを調べました。



ホテルのすむ水辺湿地・川ビオトープの生きもの調べ

ビオトープにどんな生きものがいるのか？どの種類が多いのか？それはなぜなのか？を調べるために、定期的に、生きもの調べを行います。この活動は、学校や修学旅行、島あっちいなどの旅行者・家族など多くの子どもや大人たちに人気の活動です。私たちホタレンジャーが、教えることもあります。この自然体験は、一度すると楽しくてとてもいい思い出になります。昔の子どもたちも夢中になって遊んだ思い出の一つに、この水辺の生きもの探しです。昔も今も変わりません。でも今は生きものがいなくなったり、減ったりしています。



ホタルのための水辺の湿地ビオトープと川の赤土泥上げ

生きもの探しをした後は、川や湿地の赤土泥上げをしています。学校や修学旅行、島あっちいなどの旅行者・家族も子どもたちも大人もみんな夢中になります。いつも行う作業ですが、自然に感謝する、もっと生きものが増えてほしい、これ以上汚したくない、楽しい気持ちにしてくれた生きものにお返しをしたい、みんなの気持ちはさまざまです。



でも、泥上げをした後も気持ちはとてもいい気持ちになります。だから、人気の作業なのです。生きもの探し以上に真剣です。自然と島と、地球に感謝のための作業です。きっと今よりもよくなると思います。

ごみ拾い



昨年続き、今年も、サンゴレンジャーにも挑戦しています。ホテル館の上流側の大きな橋から、ゴミを投げ捨てる人が後を絶ちません。大量のゴミが橋の下に散らかって堆積しています。ベッドやテレビ、コンロ、ガスボンベ、たくさんのペットボトルにビール缶、農薬袋に農薬ビンなど、これらはホテル館を經由して、海へと流れだします。何度拾いに行っても、まだ底が見えません。もちろん海へと流れだしたゴミも、漂着ごみと一緒に拾います。果てしない作業ですが、世界中の人が拾い集めています。不法投棄する人がいなくなれば、確実に減り続けます。赤土と同じです。土壌流出もゴミの投棄も自然を破壊し、結局は私たちの生活を脅かすだけです。二酸化炭素を減らすためにも、私たちは植栽を続けています。多様な生きものが生きていけるように、外来種を減らし在来種が増えるようなビオトープをつくり、バスターフィッシングも毎年行っています。先輩ホタレンジャーは、オーストラリアまで行って、環境や野生生物保護のために学んできています。私たちも、身近な環境から少しずつ良くする活動を今後も続けていきたいと思っています。

完了！

※活動した子どもたちの意見・考えを取りまとめて、先生や団体の代表が記入してください。

⑪ 活動で工夫したこと・気づいたことなどを記入してください。(800字程度以内で簡潔に)

工夫したことは、上流の農地からホタル館に流れてきた赤土や側溝の赤土泥を集めて、どんぐりの苗づくりや植栽ができました。みんなで側溝をきれいにし、川や湿地のビオトープの材料として利用し、海に流出する赤土の量を減らすことができました。その体験活動は、島の内外を問わず、多くの子どもたちを引きつける力にもなりました。赤土で埋まった湿地は、みんなで少しずつ取り除き回復させていますが、あまりに大量の赤土なので、重機を使つての作業が早急に必要です。橋の修理ができないため、重機が入れられないためという理由で、この取り組みが始まりました。おかげで意欲的な仲間が島に来ていただいたが、沈殿池の役割をする氾濫湿地なので、定期的に重機で泥上げメンテナンスする必要があります。予算をかけて重機を乗り入れできる橋の敷設工事をしてほしいのです。機械なしに7年間も手作業で行ってきたのですから、凄いことです。私たち「こどもホタルンジャー」にできることは継続することです。そして、バトンタッチすることです。良心のある大人であれば、私たちの作業のバトンを一度は受け取ることができるはずです。そうすれば、その大切さがわかります。絶滅が心配されているクメジマボタルを昔のようにふつうにみられるようになる日まで、未来に期待と自信をもってホタルンジャー活動を続けたいと考えています。ホタルンジャーキャンプも、毎年行っているけれども、いつも違う経験ができます。今年は、ピザ窯ができたので、オリジナルピザづくりに挑戦しました。川で捕まえたエビや田んぼのイナゴを、畑ビオトープで作ったバジルやトマト、クレソン、カボチャとともにトッピングすることができました。カメムシを食べたホタルンジャーがいて、「そら豆の味」がするといって感動していました。側溝で繁殖したカワニナを集め、私たちがつくった川ビオトープの石積み瀬にたくさん放流した小川では、造られたばかりの滝へ大量に遡上し、稚貝(赤ちゃん貝)をうんでいます。ホタルの幼虫が喜ぶはず。今年も球美の里の子どもたちや離島体験交流の小学校、島あっちいなど多くの子どもたちが、湿地や川の泥上げ・石積みの体験をしました。大きな成果につながっていると思いました。とても感謝しています。

⑫ 活動からわかった課題、自分たち「こどもホタルンジャー」にできることを記入してください。

(800字程度以内で簡潔に)

2007年4月に久米島ホタルンジャーを結成して以来12年間、流出する赤土を少しでも減らす取り組みや、水辺の生きものを守る森づくり・湿地づくり・滝づくりを、手作りでみんなのリレーで続けてきました。この活動が実り、在来種や固有種が多く生息できるビオトープが、少しずつ実現しています。今年4月に、久米島で16年ぶりの全国ホタル研究会沖縄久米島大会が開かれました。私たちは、全国のホタルを保護してきた方々の前で、これまでの活動を発表しました。私たちが作ってきたホタルビオトープも見学していただきました。台風が来るたびに、赤土流出で川底に埋まった赤土と石を掘り起こし、ショベルとバケツを使って、たまった泥や赤土を取り除く作業、石を積み重ね瀬を作る作業を続けてきた努力の成果です。ホタルを守るために立ち上がった久米島ホタルンジャーの子どもたちと、島の自然を思いっきり楽しみ、自然のことをたくさん知り守る大切さを学ぶ活動を、年間50回、12年間も続けてきたこと。その成果で、ホタル館は、本物のサステイナブルを理解できる施設になったこと。ホタル館の自然と共に、それを支えてくれた子どもたちも大きく成長したこと。地球環境を持続するためには、小さな生き物たちの大切さを学び、それらを守る必要があることを伝えること。深い自然を壊さず、自然を再生するために活動を続けてきたホタル館とホタルンジャーの取り組みは、私たちの人生をより一層豊かにしてくれたこと。それを劇や研究発表、活動発表で伝えることができたと思っています。なぜなら、劇団シンデレラの方々の協力で、私たちの想いは、正確に伝わったと感じたからです。劇団シンデレラの皆さん、本当にありがとうございました。そして、劇という初めての研究発表の取り組みに理解を示し、当日の発表のために尽力していただいた、ホタル大会実行委員会・久米島博物館の皆さん、町長をはじめとする久米島町役場・教育委員会・商工会・婦人会・区長会・議会のみなさん、歴代の全国ホタル研究会会長・事務局のみなさんに感謝します。大人と子どもが本気になればこんなにできるのだと確信できました。

※活動した子どもたちの意見・考えを取りまとめて、先生や団体の代表が記入してください

⑬ 選考された場合の発表者(こども2名)の氏名・学年

氏名(ふりがな)	学年:
氏名(ふりがな)	学年:

※決まっていない場合は、記入しなくても構いません。

2019年久米島ホタルレンジャーの活動報告

全国ホテル研究会沖縄久米島大会

「久米島ホタルレンジャー、ホテルを守るために島の自然を楽しく学び保全する活動発表」

國吉朝陽・富山心・仲宗根星斗・當間彪真・小川陽翔・當間七星・近藤脩平・山里穂高・國吉甚希・吉永跡・吉永寵

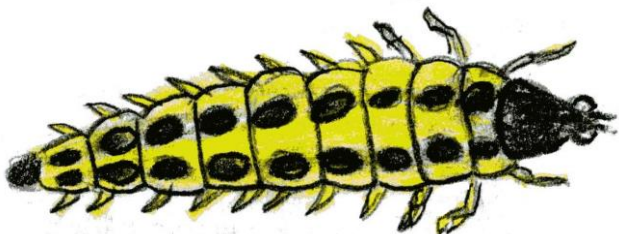


昔の久米島は、お米を作る田んぼが、海の近くまでありましたが、赤土を流さないで、川も海もきれいでした。今は、畑の肥料や土が、川や海に流れると、大変だと考える人が少ないので、川や海にすむ生きもの達は、どんどんいなくなっています。でも、多くの方が、赤土が流れ出さないような対策をしてくれたら、島の自然は、昔のように良くなります。それに気づいてもらえる事も願いながら、私たちは、川に溜まった赤土泥を取りのぞいて、生きもの達が生きやすい環境を作っています。たくさんの生きものがふえると、クメジマボタルも同じように増えてくれるからです。

「久米島のサワガニ研究発表」 佐藤智映



私がサワガニを対象として研究した理由は、幼い頃からサワガニが好きで川遊び等でよく見つけたりしていたこと。そして、天然記念物であるキクザトサワヘビとの三度の出会いが、私の研究への口火を切ったと言えます。私はこの研究に対して、最初はただの興味からおこなったもので深い考えはありませんでした。ですが、研究を数年通すに連れてサワガニの環境における重要性がわかり考えが変わりました。また、ビオトープ作りなどが進むに連れて居場所を確保し、彼らの過ごしやすい空間ができていくのは一つの楽しみにもなりました。大人が何の手立てもせずに関心のままでいると、いずれ島の固有種であるキクザトサワヘビやクメジマボタル、クメジマオオサワガニなどのサワガニ類は、地球や沖縄・久米島の数々の生物とともに、絶滅してしまうかもしれません。それでも私や久米島ホタレンジャー活動は、形を変えながらも未来に向けて広がり子ども達に受け継がれ、絶滅の危機から守るための力に必ずなってくれと信じています。



「ホタルが町にやってきた」 劇団シンデレラ&ホタレンジャーOG/OB

佐藤文治・仲間万珠・中根みすず・佐藤友里子・新城そら

ホタル鑑賞会とホタル大会発表、ホタレンジャー活動体験、研究の思い、活動研究の動機、未来への思いなど（報告：佐藤文治）

2019年となり、私はオーストラリアでの環境保護活動を終えて日本に帰ってきました。日本と海外との環境保護における価値観や対策、手段などを学ぶためです。その結果、私は日本の——特に田舎の地域における環境保護活動家の——広報力が強くないのではないかと思います。そこで私は、高校時代に三年間続けてきた演劇活動を利用し、環境保護活動の大切さや研究成果を子供にでもわかりやすく伝える方法を考え、動画制作活動を始めました。



そんな中、熊本県荒尾干潟で行われたラムサール条約登録湿地での活動で、私は劇団シンデレラと出会いました。湿地の大切さを、ミュージカルを通してたくさんの人に知ってもらい、生き物に親しんでもらおうとするその活動に私は感銘を受け、入団することにしました。そして今年2019年に沖縄県久米島町で開かれたホタル大会とホタル発表会。今まで私が活動し、守り続けてきたクメジマボタルの生息地に帰ってきました。クメジマボタルの大切さをみんなに伝えるミュージカル劇団の一員として。結論から言って、大成功だったように思います。ホタルは私が活動していた10年前と比べ、明らかに数を減らしていました。それは体感として分かるほどに。久間地川の流れる五枝の松やカンジンダムでは、毎年ホタルが舞い、衣服に止まる程でした。しかし今は数匹見られればいい程度。さらに、久米島町をはじめ多くの町民の最後のホタルのよりどころ『海とホタルの見られる場所ミーフガーの滝スポット』では、前日いくと、たった一匹しか見られませんでした。



そんな『ホタルの居ない環境』を全国から集まった方々にお見せするのかもしれないと思うと、正直不安で仕方がなかった。だが、私たちホタレンジャーが長い年月をかけて作り続けてきたホタル館のビオトープでは、クメジマボタルが確実に増えており、子供たちが一丸となって作り続けた森や川を、ゆっくり点滅しながら移動するホタルは感動モノでした。星空の映える快晴の夜、空と川面が星と蛍で煌めき、私達の活動の成果がそこにあったと思うだけで、なんだか幸せな気分になりました。



この日から、私は劇団シンデレラの一員として、そしてホタレンジャー0Bとして、環境保護を全国の人に広め伝える活動をより本格化させようと考えています。高校時代、共に動画を作ってきた友人達とも協力し、全国の自然と関わる子供たちの思いを映像やミュージカルといった『誰もが親しめるもの』に昇華したいと思っています。私が目指すのは『日本を超える広報力』です。久米島にしかない特別な自然を、より多くの日本人へ。そして、自然が大好きな世界中の仲間たちに。そして自然をまだ知らない未来の子供たちへ。伝え広めていきたいと思っています。環境保護は、その土地で自然を知り、学び、支えるために活動を続ける人間と、その活動を応援していただけるたくさんの人々の繋がりによって成り立つことを、私はオーストラリアの留学経験で学びました。



私は久米島を始め、日本全国で生き物たちのために努力を続ける人々と、そのことをまだ知らない未来の仲間たちを繋げるための窓口になりたい。そしていつか、みんなが守り続けてきた美しい自然を、沢山の人が見に来て、自然だけでなく、地域の経済や人々の心、思い出まで活性化して行けるようになりたい。そんな私のハッキリとした『夢』を見つけることが出来たここ数年間の活動を、私は忘れないように心に刻んでいたいと思っています。子供の頃『ホタルを守らなきゃいけない』という熱意を抱き活動を続けてきた私のような、たくさんの子供たちを、それを支える大人たちを、繋げ、結び、もっともっと応援したいと思っています。



ホタル館自然を知る活動

私たちが活動しているホタル館の絵です。ホタルレンジャーの最初の活動は、ホタル館の生きもの調べです。ビンゴゲームを利用した植物探しを行いました。里地ビオトープや畑地ビオトープ、里山ビオトープ、湿地ビオトープがあります。それぞれのエリアで、ホタルを復活させることが目標です。今年は、念願の滝ができました。下のビオトープ図にあります。

久米島ホタルの里自然公園ホタルビオトープ



久米島高校インターンシップ：玉城琳・当真翔也解説

ホタル館湿地ビオトープ

川で生き物を探しながら、スタッフがいろいろな植物、生きものの知識を教えてくれるので、ちょっとだけ生物博士になった気持ちになります。湿地の水面上には色鮮やかな花が咲いており、その周りを虫たちが飛びかい、水中では、泥の中や植物の中に生きものが隠れています。

ホタル里山ビオトープ

いろいろな種類の動物や植物が生息しています。自然の音を感じ取ることができ、居心地が良い。見るだけでなく、実際に触れたり食べたりできます。きれいに整備されているから、落ち着いて観察に集中できます。ナイトバージョンもぜひ見てください。このビオトープで生きものの四季を感じることができます。

ホタルの里地・畑地ビオトープ

滝が完成すれば、ホタルが集まりやすくなります。ここでは見覚えのあるなじみの深い小さな生き物が多い。その生態をまじかに観察することができます。

ホタル館展示室&東屋

様々な生きものが、生態系を模して飼育展示されています。植物、昆虫の珍しい写真が展示されており、ホタル館が自然のために活動してきたことを知ることができます。



ホタレンジャーキャンプイベント：オリジナルピザづくり

ピザ窯づくりを手伝った。畑から流出し川に大量に堆積した赤土泥と、埋まっていた川石を使ってピザ窯をつくりました。川から運び出す作業は大変でした。でも、年に一度だけのエビやバッタの素揚げはとてもおいしかった。ホタル館で育てたバジルやカラシナ、クレソン、カボチャ、空心菜(ウンチェーパー)などをトッピングして手作りオリジナルピザをつくりました。とてもおいしかった。ピザづくりの先生は、内村未来さんと、ホテルのシェフ戸嶋晃太さんが焼いてくれました。



思い出に残るホタレンジャーキャンプでした。

ビオトープづくり：クメジマボタルの産卵場所の滝づくり、100年先の森づくり

クメジマボタルの産卵場所になる滝と滝から枝流れする細流を作りました。水辺は蚊が発生しやすいので、湿地ビオトープから、ヤゴや小さなゲンゴロウなどを採集しソーティングしてより分け、種類と個体数を調べ、その一部を放流しました。



そして、陸生のホタルのエサのカタツムリやミミズを育てることにしました。滝ビオトープに敷く落ち葉集めもしました。



この滝の周辺にどんぐりの森づくりをするための準備もしています。少しずつどんぐりを拾ってきて、植木鉢で3年から7年育ててから植栽します。今年植えた苗木も先輩ホタルレンジャーが育てたものです。また、川や湿地ビオトープに流れてきた赤土はホタル館にたくさんたまるので、みんなでバケツリレーをしながら取り除き運んだ土です。この土は植栽だけでなく、カタツムリやミミズなどのえさにもなり、植物やホタルを育てます。しかも、土を取り除くと、うまった石が出てくるので、その石を瀬に運んでカワナやホタルの幼虫のすむ石のすき間すみか(家や隠れ家)も作ることができます。他にもいろいろな生きものが住めるので、とても楽しい作業です！今年、ホタルのすむ森づくりは、滝づくりと一緒にすることになりました。100年先まで生かすのが目標のホタルの森づくりなので、20年先、30年先、50年先が楽しみです。この作業のおかげで、ホタルだけでなく、いろいろな植物や鳥、トカゲ、カエル、昆虫、カタツムリ、ミミズ、ワラジムシ、キノコなどが増えたので、森の生きもの調べが楽しくできるようになりました。ネイチャーゲームも楽しく取り組むことができます。また、集めた赤土泥・土、落ち葉などは畑や植栽木の肥料になります。少しずつ多様な自然環境・生物環境がつくられています。



ホタルのすむ水辺湿地・川ビオトープの生きもの調べ



生きものが毎年増えているので、生きもの調べが楽しみです。時間があれば、網をもって川や湿地に入り、フナやテナガエビなどの生きもの探しを行います。しかも、大物が取れるので、とてもドキドキします。私は、巨大なおオウナギをつかまえました。とてもうれしかったです。巨大なおオウナギはかみつくこともあるので気をつける必要があります。小さなおオウナギは手でつかむことができます。でも、粘液に毒があるのでよく手を洗いましょう。クメジマオオサワガニやクメジマミナミサワガニなどのサワガニもビオトープで見つかり、タナゴモドキが湿地で見つかった時はとても驚きました。

ホタルのための水辺の湿地ビオトープと川の赤土泥上げ

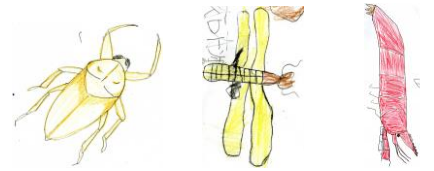


大人と一緒に改善していきたいことは、赤土の流出の対策と赤土を取り除くことです。

子どもだけの話を聞いても納得する大人は少ないと思います。でも、今の現状を伝え、大人の人とも協力することで農業をしている人たちと説得できると思ったからです。

赤土の流出を減らすことと。

自然を増やすことでも。



大人と一緒に改善したいこと

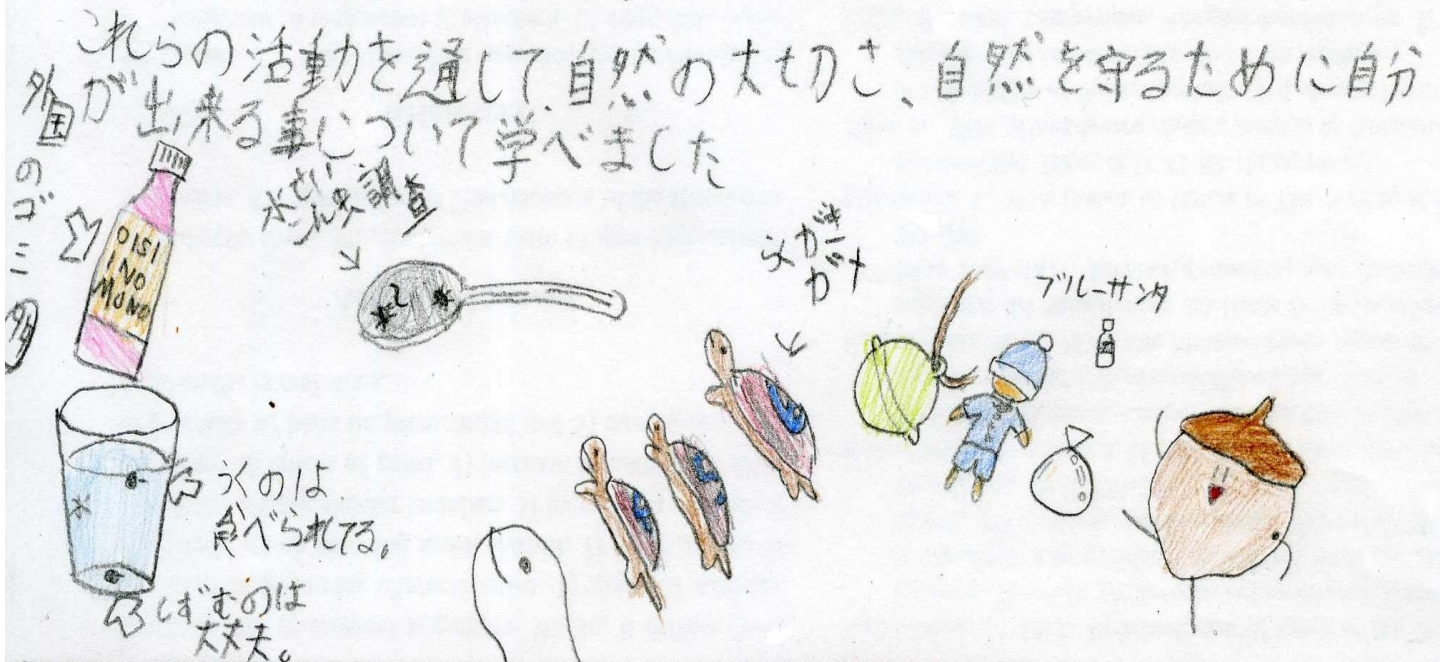
大人となら、畑などから流れる赤土を囲いをつけたりして防ぐことはできないかと思った。
もう少し人間と自然がふれあえる所を造ったらどうか?

子どもでも赤土を防げる(ちょっとだけ)子どもの少しの人が、赤土を防ぐことで、はもんのようにみんなに広がれば良いと思った。又、みんなが自然とふれあうことにより、自然についてあいちゅうがわき、久米島を守ろう!!と意識するのではないかと考えた。



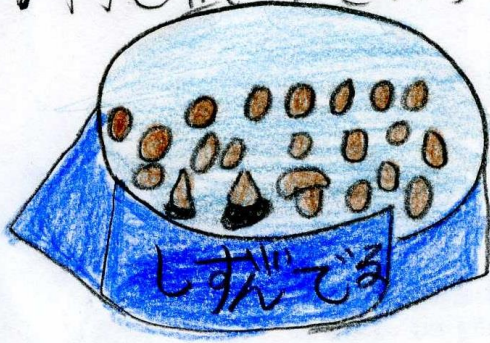
まとめ

- ① ドングリの調査 この活動を通して虫に食べられたドングリが、食べられていないドングリかの見分け方を学びました。見分け方は水にうくのが食べられたドングリ、しずむのがそうではないドングリです。
- ② ヤマガメさがし(せ中にらくがきされた) この活動ではたれかがリュウキュウヤマガメのせ中にらくがきをして、そのらくがきをされたヤマガメをさがして、らくがきを消してあげました。
- ③ 人工たき、ヤゴなどきつかまえてはなしました。
- ④ 僕は、かんきょう会議に行き、沖縄の自然、湿地を守るために、石垣や大宜味の人達とどう守るか、色々な案を出しあって、考えました。
- ⑤ サンゴレンジャーで、サンゴをはじめとる、海の自然を守る活動を話しあいました。
- ⑥ 水せいん虫調査 この活動では、池からどろをすくって、その中にいる生き物を調査して、たきにはなしました。
- ⑦ ブルーサンサで、海におちている、「うき」や「プラスチック」などをひろって、色々な事を学びました。



どんぐりを集めて、水の中に入れて、うくと、虫に食べられて、しずおし、中に実が入っている。

- ・生き物が物のレポート
- ・サンゴレインジャーで那覇は行った。
- ・竹で武器を作った。



- ・水生生物調査でヤゴヤカイをして自工でつくられた、たきの下流に逃がした。
- ・みんなで、ブルーサンタに着がえて、海岸をいのゴミ拾いをした。

リュウキュウヤマがメを探しに行くと、5匹程みた。きりもできてきた。

